
鬼籍に登る

黒目

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼籍に登る

【著者名】

黒目

【作者名】

黒目

黒目

【あらすじ】

とある村に住むウタと宗のお話。才色兼備であるウタと、少し地味だけれどしつかりした宗は、お互い想いあつて幸せに生活を送っていた。しかし、いつしかそんな日々が壊れてしまつて…

鬼籍に登る

「ウタ…。ウタつ……」

愛しい声がする。

「おーい…ウタ？」

私を呼ぶ、愛しい声。

足音と共に近づいてくる、愛しい人。

やがて私の姿をその瞳で捕え、小さく微笑む。

私はいつもここに居るのだから、探す必要などないのに。

それでも彼は、少しあやうさぎとしながら、いつもこの急な道な

き道を登つてくる。

「……ウタ。」

もう一度、優しく私の名前を口にし、優しく笑う。

そして、ゆっくりと私に向けて、大きな手を差し出す。

私も真似て、ゆっくりと、細い手を差し出す。

重なる。

温もりを感じた。

今私のとつての全て。

やわらかい、温もり。

私は幸せだった。

村の中でも、特別な家柄に生まれた私。

小さな頃から、必要以上なくらいの愛情を注がれて育つた。年を五つ数えた頃から、あらゆることを学び始め、その全てにおいて、飛びぬけた才能を披露した。

身体は美しく伸び、声は優しくも気高く、精神も清らかで、穢れなど知らなかつた。

私は特に、武芸と着付けに関心を持つた。

父と母は武芸が達者で、道場で汗を流す姿をみて、余りの華麗さに声を失つた。

村を歩く大人の女性の、幾重にも重ねた着物は、鮮やかで私の心を奪つた。

私の年が十五を数える頃には、私の美しさと強さは、村だけでなく、隣の国にまで知れ渡つていた。

いつのまにか、村の人々は、私を「神子」と呼ぶようになった。私が祈れば、風が音を鳴らしながら吹き、雨を乞えば、雨雲が競い合うように私の上の空に集まってきたし、何より私は、神の名を冠する一族の、百八年ぶりに生まれた長女だった。

十三になつた頃、だんだんと婚姻の話題があがり始めた。

村一番の力を持つ私の家。

隣の国で長を務める家の長男までもが、名を捨ててでも、私との婚約を望んだが、私は頑なに拒んだ。

私には、ずっと前に誓い合つた人がいたから。幼なじみの、宗。

実際は、「そうえもん」と難しい漢字で書くのだけれど、幼かつた頃の私にはさっぱりで、ずっと「宗ちゃん」と呼んできた。

宗ちゃんの方も、私の名前がよくわからなくて、勝手にウタと名づ

けて呼んでいた。

「宗ちゃん」「ウタ」

お互いそう呼び合つて、いつも一緒に遊んだ。

宗ちゃんのお父さんは、とても偉大な封士で、よく妖魔の噂を聞きつけては、隣村までも飛んでいつて、あまり会う機会がなかつた。宗ちゃんもそのことでいつも寂しそうで、よく私の隣で泣いていた。私はそこで優しく頭をなでてあげるのが大好きだつたから、宗ちゃんのお父さんが帰つてきてほしいのかどうかはよく分からなかつた。何でもできる私といつも一緒にいた所為で、日陰者だつた宗ちゃん。封士としての素質はそこそこで、それ以外はとても平凡な地味な男の子。

それでも、私が一番欲しかつたのは、その平凡さだつた。

まだ七つくらいの頃、最近なかつたと思つたら、急に私の家まで来て、お父さんが帰つて来ないと泣き喚いた宗ちゃん。

このときは、いつもの倍くらいの涙が溢れていて、頭をなでてあげても、なかなか治まらなくて不安になつた。

それで、いつもと違つことをして笑わせてやろうと思つて、私は庭の虫を捕まえようとした。

そのとき、私はもつたばかりの鮮やかなお気に入りの着物を着ていて、慣れていない格好で急に動いたものだから、見事に転んで着物を汚してしまつた。

お気に入りの模様が土色で染められたのを見て、私はこりに大きな衝撃を感じた。

瞬間、私の意思もなにも関係なく、大粒の涙が溢れ出してきて、私は恥など知らずに大声で喚きだしてしまつた。

悲しみでいっぱいのはずの心の隅で、私はこの後の酷い状況を思い浮かべていた。

子供一人の泣声が奏でる歪な音。

きっとお父さんが叱りにくるのだ。

少し不安も重なつて、さらに大きな声で泣く私。

でも、泣き声は一つだった。

少し不思議に思つてゐると、頭の上に柔らかい手の感触がやつてきて、それは私を慰めるように動いた。

視線を上げると、下唇を噛んで、必死に泣くのを堪えながら、私の髪をわしゃわしゃとなでてゐる宗ちゃんの姿があつた。

その姿はとても大きくて、格好良くて、男らしくて。

ずっと面倒を見てあげていてと思つていていたのに、いつの間にか宗ちゃんがお兄さんになつていた。

「……僕が、そばに……いる……よ」

まだ少し嗚咽の残る声で、宗ちゃんは優しく言つてくれた。

「ずっと……ずっと……そばに……いるから」

もう一度、今度は力強く言つてくれたとき、私は感じた。私たちはお互いに必要としているのだと。幼い七つの心で。それから、一人で小指を結んで、「えいえん」を誓つた。結んだのだ。

破られることのない、約束を。

手には、まだ優しい温もりが残つていた。

宗ちゃんは帰つてしまつた。

此処には長くはいられないから。

縛られた空間。

生のない、空間。

さつきまで重ねていた手を頬にあてる。人の、温もり。

ほとんど忘れてしまつたけれど、宗ちゃんのだけは覚えていられる。それだけで幸せだった。

こうして幸せを感じると、宗ちゃんは幸せなのかどうかと考えてし

まう。

私のことなど忘れてしまえば、きっと幸せになれるのだろうに。
私は分かっている。分かっていて、宗ちゃんを求めている。
ここにが消えそうになり、泣きたくなつた。
けれども、もう流すための涙など、とうに枯れてしまつていた。
私は目を閉じ、手を手で包み込む。
温もりが消えないように。

私は十七になつた。

婚姻の話は、もうみんな諦めていた。

宗ちゃんは確実に封土としての実力が上がつていて、村全体で、私と宗ちゃんの仲は認められているようだつた。

お父さんは、婚姻を諦めた代わりに、道場を継ぐように言つた。
よりいっそう武芸に力を入れた私の強さは、村びこりか周辺諸国に
敵はないと称されるようになつた。

私はそれでよかつた。

毎日大好きな稽古をして、時々自慢の着物を身にまとつて宗ちゃん
と歩く。

私たち一人は、村民全員の憧れの的だつた。

幸せ、だつた。

ある日、隣の国で道場を開いているという男が、弟子を何人か連れ
てやってきた。

どうやら、私の噂を聞いて、女が男より強いなどありえないと考え
たらしい。

私のそばにいると誓つた日以来、道場にも一緒に通つていた宗ちゃんが、

「僕に任せて」

と、一言だけ残して、男達のもとへ向かつた。
なにやら話したあと、相手の男と宗ちゃんが模擬戦をすることにな
つた。

まず自分を倒してからにしる。とか言つたのだらう。

宗ちゃんは最初、見るからに武芸に秀でているとは思えない体つき
だつたけれど、誰よりも努力して、今はかなりの腕前になつていて。
二人は、お互に木刀を持つて向かい合つ。

相手の男のほうが、頭二つ分も大きい。

誰かが、甲高い声で合図をしたあと、大きな音とともに一人が打ち
合つ。

相手の男は思ったとおりの、力任せの戦術で、宗ちゃんは隙をみて、
反撃を繰り返している。

互角だつた。

荒々しさのなかにも、相手の動きをしつかりと捉える田を持つ相手
の男。

正直、宗ちゃんもかなり強い方だと思つていたので、驚いていた。
何分か打ち合つたあと、相手の木刀が宗ちゃんの腕を捉えて、宗ち
ゃんは負けてしまつた。

それでも、相手の弟子は動搖している。

自分の師匠と、相手の道場生が互角に戦つたのだから、驚くのは仕
方ない。

そんな様子に気付いたのか、相手の男は、大きな声で罵倒し始めた。
この程度なら、噂の女もたかが知れている。とか、こんな道場来る
価値もなかつた。だとか。

それが、普段のあの男の態度を考えたら、弟子を不安にさせないた
めの虚勢だということは理解できたのに。

私は異様に腹が立つた。

私のことより、宗ちゃんが馬鹿にされたことに腹が立つた。

互角だつたくせに。あんなに努力している宗ちゃんを馬鹿にして……！

私は男の方へ、足を鳴らして進む。
勝負を、挑んだ。

宗ちゃんが、そろそろ来る頃だ。

私は意味もなく、髪を手でとかしたり、着物についた埃を払ったりする。

いまだに、こんなことを気にするのだから不思議だ。
何故か、今日は気分がいい。

幼い頃の夢でも見たからだらうか。

いつもより少しだけ笑顔で、宗ちゃんを待つ。
待つ。宗ちゃんを。
けれど。

待つても。待つても。

……宗ちゃんは、来なかつた。

木刀を振る。

目の前の男に向かつて。

相手は防戦一方だつた。

ただ、ただ振る。

このときの私の剣は、初めて穢れていたのだろう。

怒りを源に、力任せに、振る。

そして、相手の男が反撃を食らひ覚悟で木刀を振り下ろす。
私は、それをあつさりとかわす。

目の前には、腕。

宗ちゃんにあてたのと同じ場所。

このときの私の剣は、卑しかつた。

その腕目がけて、私は初めて「本氣」で木刀を振るつた。

自分でも驚いた。

こんなにも、疾く振ることができたのだ。

こんなにも、力強く振ることができたのだ。

こんなにも、鋭く振ることができたのだ。

目の前には、相手の苦しそうな顔。

視界の端には、青ざめた顔をした弟子達。

次の瞬間、視界いっぱいに、真っ赤な紅。

鮮やかすぎる、紅。

私は声を失つた。

相手の腕が、私の横に転がつていた。

涙を流す。

枯れたはずの涙を。

宗ちゃんが来なかつた。

此処に閉じ込められて以来、こんなのは初めてだつた。

三年間、どんな空の日だつて。

三年間、どんな体調の日だつて。

三年間、どんな祝い日だつて。

朝日が昇つて、少しすると、優しい足音を連れてやつてきた宗ちゃん。

ん。

欠かさず、私に笑顔を向けてくれた宗ちゃん。

……胸が苦しく、痛い。

ねじ切れるくらいの痛さ。

どんな稽古のときだつて、こんな痛みはなかつたのに。

痛みの種類 자체が違うみたいだ。

私の何処かでは、宗ちゃんはこのほうが幸せなのだ。だとか考えて
いるけれど、私のこころはそんな考えを頑なに否定していた。
宗ちゃん。宗ちゃん……。

偶然かもしれない。

明日にはまたあの笑顔でやつて来るかもしない。
でも、そんな考えはすぐに捨てた。

あの約束が破られたのだ。

もう、宗ちゃんは来ない。

涙が溢れる。

ずっと。ずっと。

止め方なんて知らなかつた。

正直、模擬船の後のこととはあまり覚えていない。

お父さんが来て、場の收拾に躍起になつっていた。

相手の男は、片腕を失つたショックで、抜け殻のようだつた。

そんな中で、はつきりと覚えているのは、相手の男の弟子が、去り

際に「この妖魔が」と吐き捨てていつた言葉だつた。

三つ夜を越えた頃には村だけでなく、周りの国にまでこのことは広
まつていて、いつの間にか「神の子」と呼ばれていたはずの私は、
「鬼の子」と呼ばれていた。

私が外に出なくても、

「木刀で人が斬れるのかよ……」

「昔から、不思議すぎる力があつたし……」

「宗も可愛そうだね、封土なのに鬼の子と……」

聞こえる。私の鼓膜が震えなくても、何処かでそんな会話がされて
いるのが。

悲しくはなかつた。

自分は少し人から外れた存在のはなんとなく分かつていた。
本当の自分に気付いて、みんなが怖がるのは当然だと思つた。

それでもこころが痛んだのは、あの試合のあの日も、毎日私の家
まで様子を見に来てくれる宗ちゃんに對してだつた。

思えば、あの幼い頃に「えいえん」を誓つて以来、一日も宗ちゃん

の顔を見ない日は無かつた。

何事もなかつたように毎日私に笑いかけてくれる。
もう、私にとつて宗ちゃんが全てだつた。

その数日後だつた。

私はお父さんに連れられて近くの山に向かつてゐた。
私とお父さんは口を聞かなかつた。

どこか、他人のような空氣さえ流れていった。
頂に近づいてくると、小さな洞穴があるのに気付いた。

そこには、何人かの大人達。

私は、自分がどうなるのかなんとなく理解していた。
お父さんが、洞穴に入るよう促す。

大人達は少し怯えているようだつたけれど、私はなんの抵抗もせず、
表情も変えず、従つた。

ここの中では、まだ怯える大人達を嘲笑つていた。
大人の一人が、洞穴の入り口に立つ。

見たことのある顔だつた。

愛しい人の面影がちらつく。

宗ちゃんのお父さんだつた。

頬に大きなあざが付いていたけれど、すぐに分かつた。

今まで、ぼんやりとしか覚えていなかつたその顔を、私は一瞬で
記憶した。

宗ちゃんのお父さんは、よく分からぬ文字が蛇のよう書かれて
いる札を、入り口に並べてゐる。その間、ずっと無表情だつたから、
私も無表情でその様子を眺めていた。

札を並べ終えると、先ほどの大人達と共に、なにやら唱え始めた。
とても不快な声だつたけれど、私は表情を変えなかつた。

大人達のほうに目を向けると、お父さんはもういなくなつていた。
ここが、渴いてく。

もう、どうでもよかつた。

私は目を閉じ、不意に襲い掛かった眠気に身をゆだねる。
私は、洞穴に封されたのだ。

目など覚めなくてもよかつたのに、朝日の光に起されてしまった。
なにもない空間。

入り口には、荒い柵がしてあり、戒めのように札が巻きつけてある。
近づいただけで、氣分が悪くなりそうだった。
することなど何も無く、自分でこころを空にして、過ぎ行く時間だけを眺めていた。

しばらくすると、足音が聞こえてきた。
見回りにでも来たのだろうか。

足音は一つ。

ゆっくり、ゆっくり、近づいてくる。

私は気にせず、そのまま呆けたままでいた。

しばらくして、足音がいよいよ洞穴の前で止まる。
柵の前に人影。

その人影を見た瞬間、私は空だったこころが、一気に満たされいく気がした。

「宗ちゃん！！」

私は駆け出した。

嫌だつた柵など関係なしに。

「宗ちゃん！宗ちゃん！！」

柵に寄りすぎて、腕や膝を打つた。

札に触れた所は熱くて焼けているような感じがした。
けれど。そんなこと、どうでもよかつた。
愛しい、愛しい人。

涙を瞳いっぱいに溜めて、私は宗ちゃんを呼んだ。

「宗ちゃん…」

「…ウタ。」

私の名前を、呼んでくれた。

優しい声で。

一人の間には柵があつたけれど、私はいつもよじずっとそばに宗ちゃんを感じた。

涙が、溢れる。

「……ウタ、『めん。止められなかつた』

最初、言っている意味が分からなかつたけれど、宗ちゃんの顔にできたあざと、昨日の宗ちゃんのお父さんの頬のあざを思い出して、すぐに分かつた。

必死に、止めようとしてくれたのだ。

私を守りつとしてくれたのだ。

愛しさが、涙と一緒に溢れる。

どの感情からくる涙がなんて分からなかつた。

今私は、小さくて弱かつた頃の宗ちゃんにそつくりかもしれない。そんなことを考えていると、宗ちゃんが優しく手で拭ってくれた。宗ちゃんの手には、札が包帯のようになつてあった。

「今の僕には、結界の中に、この手を入れるぐらいしか力がないけど…

約束する。必ずいつか父を越えて、ウタをここから出してあげる。もちろん、『そばにいる』約束も守るよ。毎日この時間に此処に来る。絶対に。」

宗ちゃんが私の手を握る。

すこく暖かくて、優しい温もりがあった。

宗ちゃんは、これでいいのだろうか。

幼い頃誓つた「えいえん」が、宗ちゃんを縛り付けてしまつのではないか。

そんなことも考えたけど、私ひとつこの世界は、もつ宗ちゃんしか残つていなかつた。

私は、握り返した。

約束と共に、愛しい人の手を。

泣き疲れた。

宗ちゃんが来なかつた。

それは、私の世界が終わつたのと同意義だ。
悲しい。とか、苦しい。では表現できない。
終わった世界で、私が生きていける訳がない。
涙は、まだ止まらない。

「……ウタ。」

急に呼ばれた気がして、驚く。

倒れたままだつた体を起こすと、田の前に、宗ちゃんの姿。
なんで?

なんで、この洞穴の中にいるの?

急に宗ちゃんの力が強くなつた?

そんな訳ない。

田の前にいるのは宗ちゃんなのだね?つか。

「…ウタ。」

もう一度、私を呼ぶ。

抱きつけばいいのに。

なんでいるのかとか、そんなこと考えずして、宗ちゃんの胸に飛び込
めばいいのに。

私は、おかしくなつているのだろうか。

宗ちゃんが、ここにいる?

なんで?どうやつて?

ずっと、意味もなく思考が回り続ける。

どうか、夢なのか。

約束が破られてショックを受けて、泣いて、疲れて、眠つてしまつ
たのか。

そう考へると、急に田の前の宗ちゃんがぼやけていく。

夢なんでしょう？

頭が割れそうになる。

苦しい。

「…ウタ？」

宗ちゃんの顔に、不安が影を落としている。

そんなことしたって、私の田は「まかせない。

夢なんでしょう？あなたは。

確かめなきや。

ほら？よくあるじやない。

夢かどうか確かめるために、体のどこかをつねつたりするあれ。

確かめてあげる。

いつの間にか、私の手にはあの田の木刀。

急におかしくなってきた。

口元がゆるむ。

頭の中で閃光が走った気がして、田が眩んだ。

ゆっくり、田を開ける。

目の前に宗ちゃん。左にも宗ちゃん。右にも宗ちゃん。後ろにも宗ちゃん。

斜め前にも、斜め後ろにも、宗ちゃん、宗ちゃん、宗ちゃん。

そして、私の手に、紅に染まつた木刀。

私、幸せ。

宗ちゃんに囲まれて生きている。

胸の奥から、笑いが込みあげてくる。

嗤つ。

今まで出したことのない声で。

血に汚れた手を高々と上げて、嗤つ。

目が覚める。

体は異常な量の汗をかいていた。

夢。

よかつた。あんな恐ろしい光景、もう見たくない。

ふと、疑問に思う。

どこからが、夢？

私は、自分の手を見る。

温もり。優しさ。苦しみ。悲しみ。

村。道場。屋敷。山道。

大人達。お父さん。

宗ちゃん。ウタ。

そうか。夢。

全部、夢。

さつきまでの感覚が、渴いた音をたてて崩れしていく。

目を逸らし、見えなくしていた現実が覆いかぶさつてくる。

やがて、私は戻ってきた。

やわらかい夢の中から、この現実へ。

私は、鬼。

洞穴に封され、過ぎ行く時間に身を任せ、永劫を生きる鬼。

それが、私。

感情などどうの昔に捨てたはずなのに、こんな長い夢を見るなんて。

人の夢は儚いと聞くけれど。

鬼の夢はなんて残酷なのだろう。

ここに鬼を、空にする。

私は、ここにいる。ずっと、このまま。

「……。」

何か、聞こえた気がした。
私を呼ぶような声が。

「……。」「……。

確かに聞こえた。

耳を澄ませていると、今度は手が伸びてきた。
何処かで見たことがあるその手。

何か巻いているようだけど、よく見えない。

：彼の手だ。

私は思い出す。

さつきまで笑顔を向けてくれていた彼。
でも、あなたは、私の世界の中で生まれた夢に過ぎなかつたはず。

手は、必死に私のほうへ伸びてくる。

ただただ、私を目指して。

「……迎えに来たよ。」

はつきりと、聞こえた。

「約束、やつと守れる……。」

あの人の、声。

信じられなかつた。

「なんで……あなたは私の夢に出てきただけ……

また私は、夢を見ているの？」

「違うよ。此処は確かに君が息をしている現実……」

「じゃあどうして？どうしてあなたが此処にいるの？」

混乱する。さつきまでのよきな絶望の続きなら、もつたくさんだつたから。

だけど。

彼は、優しい声で言つた。

「約束、しただらう？」

「……つ……」

：胸が張り裂けそうになる。

覚めて消えていった夢の中の、「えいえん」の誓いを守り抜こうか。
いつのまにか。

彼が、愛しい。

捨てたはずの感情が、彩りを取り戻していく。
こんなことがあるなんて。

夢みたいだ。

夢? やっぱり、今の私は夢をみてるのだろうか。

… 今度は考えなかつた。

導かれるように、私はその手を握る。

強く。強く。離さないようじ。

この手は、きっと私を明るい場所に連れていってくれるから。

夢の中でしか触れられなかつた彼の手が、今こいつして私の手を包んでいる。

優しい温もりと約束が、そこにはあつた。

(後書き)

初めての投稿作品。

初投稿でいきなり夢オチつてのは案外斬新・・・?ではないですよ
ね。スマセン。

いろいろと突っ込み所満載のこの小説を最後まで読んでくださった
方、本当にありがとうございます!

よろしければ、感想をいただけるとうれしく思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0328f/>

鬼籍に登る

2010年10月13日18時02分発行